走れメロス太郎

Tobi.

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

メロス太郎が残虐な王様を倒そうとするお話。

目　次

メロス太郎ｖｓメロス三郎
①　メロス太郎の激怒、そして決意。 ―――― 1
②　メロス太郎の王様討伐計画 ―――― 5
③　さようならメロス太郎 ―――― 9

メロス太郎ｖｓメロス三郎

①　メロス太郎の激怒、そして決意。

むかしむかし、あるところに、おじいさんと、おばあさんが、すんでいました。
おじいさんと、おばあさんには、こどもがいます。
そのこのなまえは、メロス太郎。
うそや、ひとをうたがうことがだいきらいな、３７さいのじゅんすいなしょうねんです。
メロス太郎には、いもうとがいます。
なまえは、メロス花子といいます。
おにいちゃんによくにて、うそがきらいな、３５さいのおんなのこです。
メロス花子は、もうすぐけっこんします。
けっこんしきももうすぐです。

あるひ、メロス太郎は、けっこんしきでひつようなものをかいに、まちへでかけました。

まちへつきましたが、まちはとてもしずかです。
メロス太郎は、ふしぎにおもって、そのへんをあるいていたわかものに、こえをかけました。
太郎「ねえ。なんでこのまちはこんなにしずかなの？」
若者「それはこたえられないんだ。ごめんね。」
メロス太郎はわかものににげられてしまいました。
またすこしあるいていると、メロス次郎というせいねんが、あるいていました。
メロス太郎は、こんどこそとおもって、こえをかけました。
太郎「ねえ。なんでこのまちはこんなにしずかなの？」
次郎「それはこたえられないんだ。ごめんね。」
にげられてしまいそうになりましたが、メロス太郎はメロス次郎のうでをつかんで、しつもんをつづけました。
太郎「にげないでこたえてよ。」
次郎「・・・おうさまは、ひとをころすんです。」
メロス太郎はおどろいて、くわしいことをききました。
このくにのおうさまは、じぶんがすこしでもあやしいとおもったひとはすべてころす。

じゃちぼうぎゃくなおうさまでした。
これをきいて、

メロス太郎は激怒した。
あの邪知暴虐の王を取り除かなければならぬと決意したのだった。

メロス太郎は王が喫茶店で食事をしていることを知り、喫茶店へと向かった。
喫茶店の中にはこの街の王、メロス三郎がいた。
メロス太郎は何も言わずに懐に隠し持っていたマシンガンを王へ向けた。
王を撃ち殺そうとしたその時。
王の護衛、メロス四郎とメロス五郎にメロス太郎は取り押さえられてしまった。
メロス四郎は即座にメロス太郎のマシンガンを奪い取り、懐に入れた。
メロス五郎はそれを見て、
五郎「それは俺のマシンガンだ！３０００円で売れ！」
四郎「それはできない！これは俺が奪い取ったものだ！誰にも渡さない！」
そうして二人がマシンガンのことで揉めている隙に、メロス太郎はこっそり喫茶店か

ら逃走した。

メロス四郎とメロス五郎は全く気付いていなかった。逃げ切ったのだ。

しかし、メロス太郎は王を殺すまでは怒りが収まらない、そういった様子だった。

所持していたマシンガンも失ってしまった今。メロス太郎はこの後どうするべきか考えるのだった。

② メロス太郎の王様討伐計画

メロス太郎はあの残虐な王、メロス三郎を倒す。そしてこの街に平和を取り戻す。
それだけのために一人、武器屋を探していた。
街を一周して気づく。喫茶店の裏に武器屋があることを。
メロス太郎はこの時間は何だったのかとぶつぶつ呟きながら、
メロス四郎、メロス五郎とすれ違ったことにも全く気付かず武器屋へと入った。

武器屋は思ったより品ぞろえが良く、優柔不断なメロス太郎は悩みに悩んだ。
ロケットランチャー、ハンドガン、チェーンソー・・・
メロス太郎はどれも優秀な武器だとは思いながらもなかなかどれにするかを選べずにいた。

太郎「何か私にぴったりな武器はないのだろうか・・・」

独り言をつぶやいた時、メロス太郎は一つの武器を見つけた。

日本刀だ。

太郎「なんと輝かしい・・・」

メロス太郎はすっかり日本刀にほれ込んだ。

正義のヒーロー、メロス太郎だったが、１５００００円と高額な日本刀を「あとで払う」とだけ言い残し、日本刀を店から持ち出した。

店員はただ、正義のヒーローの肩っぷりに呆然としているのみだった。

新たな武器を手に入れたメロスは、王を倒すための戦略を練り始める。

先ず問題となるのは、あの護衛二人だろう。

恐らく自分一人では太刀打ちできない、メロス太郎はそう考えた。

太郎「一人でできないなら仲間を無理やりにでも作ればいい。」

太郎は街中を歩き回った。選挙運動かと思うほど煩く宣伝をし、３人の仲間を作っ

た。

一人目はメロス次郎。先程メロス太郎に王の事を話した男だ。
短剣を持っており、体格もいい。なかなか使えそうである。

二人目はメロス六郎。一人で歩いていたところをメロス太郎に強引に勧誘され、仲間になった。
なぜかスナイパーライフルを持っている。こいつもなかなか使えそうだ。

そして三人目はメロス七郎。暇つぶしに、ということで仲間になった。
武器は持っておらず、拳ひとつで戦うというが、少し心配である。

メロス太郎はこの心強い3人の仲間たちとともに、あの邪知暴虐な王、メロス三郎を倒すと誓った。

この戦いは街の平和のためだ。決して負けるわけにはいかない。
メロス太郎は何度も何度もそれを繰り返し呟く。

しかし、そう思っているのはおそらくメロス太郎だけだろう。
メロス次郎以外は強引に仲間にされた奴と暇つぶしに仲間に入ってきた奴しかいないのだから。

４人で戦うとはいいつつも、現時点やる気があるのは１人、もしくは２人だけだ。

メロス太郎はそのことを薄々感じていた。
だが戦うしかない。そして勝つしかないのだ。

メロス太郎はそう固く心に誓い、王との対決に向けて戦略を練るのであった。

③　さようならメロス太郎

―

やあ、よい子のみんな。私は正義の味方を自称するテロリスト、メロス太郎だ。
もうすぐ４０歳になるのだがそんなことは知らない。
今はそれよりあの冷たくて酷い、そう。冷酷なあいつを倒さなければならないのだ。
あいつって誰か？
それはもちろんあいつだよ。あいつ。
まあその辺は気にしないで本編を読むんだ。
それではよい子のみんな、バイバイ。

―

という夢を見たんだ。
残念ながらメロス太郎にはここまでのあらすじを説明する能力もなければ信頼もない。
メロス太郎はそんなことも知らずに「やはり俺は主人公に向いているのだ・・・」などと一人で呟いていた。

ちなみに今寝ていたところは王城の中、それも王の目の前である。
倒そうとしていた王（メロス三郎）の前で爆睡してしまう主人公（）の姿に流石の仲間たちも激怒し、皆自宅へと帰ってしまっていた。
メロス太郎は最初、皆王を倒してもう帰ってしまったのかなどと思っていたが、王が目の前で仁王立ちしており、自身は縄で縛られているのだ。明らかにおかしい。
「・・・なぜこうなっているのだ」
メロス太郎は小さな声で呟いた。
すると王はメロス太郎に
「倒しに来るならせめて起きて戦え、仲間たちも怒っていたぞ。それだからいつまでたっても信頼されないのだ」
と指摘した。
これは正論なのだが、メロス太郎は認めない。
「アァ?てめえ一国の王だからってそうやって適当なこと言ってりゃ人が満足すると思ってるのかァ?生憎俺は頭がいいもんでなァ！てめえの間違った言葉は耳にも入らねえなァ!!!」
良く分からないことを言い出したメロス太郎を見て、王は
「もうこいつ殺しちゃって」

とだけ呟き、その場を後にした。
そしてメロス太郎はその夜、殺されたのであった・・・

～

それから幾年かが過ぎた。
万引きなどをして迷惑極まりなかったメロス太郎の反逆を抑え、処刑した王はむしろ評判が良くなり、王も気分を良くしたのか国民の事を考えた政治を行うようになり、シラクスの街は発展を遂げていた。
メロス太郎の仲間だった者たちも発展したシラクスの街で豊かな生活を送っている。
メロス太郎の反逆自体は失敗に終わったが、結果として街は平和となったのだから成功なのかもしれない。
今は亡きあの英雄は色んな事をしてくれた。
喫茶店に乗り込んで王を襲おうとし、武器屋で万引きをし、仲間を半ば強引に集めて王城へ乗り込んだと思ったら、最大の敵である王の前であろうことか寝てしまった。
あそこまで馬鹿で、能天気な勇者は今後現れることがないだろう。

～さようなら、メロス太郎。もう出てくるな、メロス太郎。～